

鯨 研 通 信

第 339 号

1981年 5 月

財団法人 鯨類研究所 〒135 東京都江東区越中島1丁目3番1号 電話 東京 (642) 2888 (代表)
日本捕鯨協会



北海道で鯨を捕った男の話 — 斉藤知一の捕鯨業時代 —

中 村 春 江

明治期、北海道で捕鯨業を営んだ斉藤知一のことを話しますと、大概の人は「北海道で鯨が捕れたのか？」と怪訝な顔をなさいます。私とても詳しい話はありませんが、大叔父斉藤知一の面白い話はたくさん聞いていますので、いつか斉藤の足跡を辿ってみようと思っておりました。ここでは、彼の捕鯨業に携った時代のあらましを述べてみたいと思います。

捕鯨に携わるきっかけ

斉藤知一は加賀藩の下級武士の出身で、文久元年(1861)金沢で生まれました。彼の7歳のとき明治維新を迎えるのです。維新後の世の変わりようは、大藩であった金沢の士族の生活に深刻な打撃を与えました。これを打開するため旧藩士で結成した^{いんしん}盈進社は、家禄の低い血気盛んな若者たちが主な面々で、斉藤知一は結社当初からの有力メンバーの一人でありました。

盈進社は士族投産事業を始めるに当たり、折からの北海道開拓の機運に乗って明治16年(1883)元藩主前田家の援助を得た起業社に参加し、投産の場北海道に渡るのです。

函館に置かれた起業社は、農・漁の二業をもくろみ、翌17年後志田岩内郡鞆野無納に入植し、後に前田村が生まれ、今日の共和町の一部となるのです。漁業の方は、千島園沢捉島において鮭鱒漁に着手し、今日「明治16年度の沢捉島における鮭収獲高」の記録が残っています。

斉藤は起業社の漁業の方に携わるのですが、その頃、岩内の沿海に鯨の群のおびただしく泳ぐの見た斉藤らは、捕鯨業の有利であることに着目し、起業社に建議した結果、岩内港を根拠にして明治18年(1885)捕鯨に着手することとなるのです。これが斉藤の捕鯨業にかかわるきっかけであったようです。

ところで斉藤が鯨に関心をもつようになったのは、いつごろのことでありましょうか。『稿本金沢市史』の「遠藤秀景と盈進社」と題する文に、盈進社が事業を起すに当たり、石川県江沼郡天日村の大沼喜三平という人がアドバイスしていることが書いてあります。さらに起業社の捕鯨事業について「斉藤知一が多少の経験あるを起用し従事せしめた」とあります。後者について当時23歳の斉藤が、それまでに捕鯨の経験のあろう筈もなく、この疑問は斉藤知一略伝によって解けました。それは斉藤が少年時代、金沢近くの沿海の金石で大沼喜三平が鯨猟を行っている折、これを見学のため鯨船に乗せてもらい、船酔いを我慢しながらその壮観な猟法に見入ったとありました。このことが多少の経験あるという表現になったのでしょうか、なんともお粗末な話です。

そこで大沼喜三平についてもっと詳しく知るために、加賀市在住の北前船の研究家、牧野隆信氏に調べていただきましたところ、喜三平という人物は確かにいて、小松の^{ひら}日末沿岸で捕鯨を行った話は伝わっているが、大沼という姓ではなく、彼の主人東方芝山(大聖寺藩の逸材)について書かれたもの(江沼郡史)には、「天日の喜三平」とあり、日末町史には「矢田の喜三平」となっており、牧野氏の実地調査によっては大沼という姓の家はないとのことでした。これは江沼出身の喜三平が、いつか大沼喜三平と呼ばれるようになったのではなからうかと思うのですが――。

石川県の捕鯨の始り

ちょっと余談になるのですが、斉藤が捕鯨をこころざすことに影響を与えたと思われる郷里沿海の捕鯨について調べてみましょう。

「能登・越中両国においては古来捕鯨の業なきにあ

らざるも、鯨鮠は自ら来り誤りて台網中に入るを捕うるのみ」と明治17年農務局刊行誌に載っています。これは能登の鳳至郡宇出津や、羽咋郡風戸村、風無村、千浦村、越中射水郡氷見あたりの話でありましょうか。

能登・加賀の海には数知れず群れ泳ぐ鯨がいたのですが、誰ひとりこれを捕えて利益を得ようとする者がいなかったようです。それは鯨の猟法が技術や、資金ともにむづかしかつたからでしょうか。それとも漁師の鯨を崇める風習がところどころにあったように、例えば石川県鳳至郡宇出津町役場のいう「一般的にはあらざれども、当業者の間にあつては鯨をえびすということあり、その出所詳かならざれども豊漁の因をなすことあるを以て、俗に恵比須神は鯨を保護する神となす習慣あり、かく称するに至りてならん」つまり、鯨は魚の群を追ってきて豊漁をもたらしてくれる神であるから、これを捕るなどとはもつてのほかということでありましょう。

ところが金石（現金沢市）の木嬰長次郎という人が幕末のころ、突捕り器を創り捕鯨業を企図するのですが、何分熟練と勇気のいる猟のことですから、これに応ずる者がいなかったということです。加えて「加賀国石川郡金石近海に鯨鮠の浮游あり、土民これを称して沖の殿様といい、その群集するときは恐怖し、甚しきは合掌してその害を免れんことを祈る者もあり」とあるように、加賀・能登では捕鯨を行う者がいなかったようです。しかし、この木嬰という人はよほど捕鯨業に執着があったとみえて、慶応2年（1866）堅靱の大引網を作り、資金を藩に請うたのですが許されず、明治元年（1868）7月金石の共同金をこれに当て、翌2年2月鯨を獲ることができたということです。これが加賀・能登・越中における捕鯨の嚆矢といわれます。鯨にとりつかれた木嬰は、その後も工夫を重ね鉋を創り、これを第一回水産博覧会に出品し賞を得るのであります。後にも新しい鉋を工夫し7頭の鯨を捕っています。この人は鯨を沖の殿様と敬遠した漁師たちの迷信を打破した人物ともいえましょう。

明治に入って加賀沿海の捕鯨が活発化してきます。明治初年に先に触れた江沼の喜三平が日末（小松市）にきて、村民を説得して日末捕鯨社を設け、東野清四郎をアドヤとしたのが日末における鯨捕りの初めであるということです。

同4年ごろ、捕鯨についての知識をもち、日末に移り住んで捕鯨の利を説いた河波有道は、みずからも捕鯨器械の考案や改良につとめた結果、各村に鯨猟が伝

播してゆくのです。河波有道は漁夫を指導するとともに、明治21年九州で捕鯨法を研究してきた松原久と提携して斯業のためついています。河波有道について日本漁民事績略（日本常民文化研究所刊）から移記します。

河波有道。金沢産、幼名豊太郎、号棕園。江戸にて蘭学を修む。鯨志を読み捕鯨の志を抱く。明治5年権令内田政風の賛成、石川郡徳光村藤井某、織田某、金石町漁夫与平と六年徳光村に創業一鯨を得、加賀沿海捕鯨の嚆矢。爾後各地に斯業輩出、初め各個併接の網を後一統毎に離散する法考案奏効。十四年第二回勸業博に受賞。第一回水産博受賞、二十三年没、六十九歳、第二回水博追賞。

明治10年（1877）頃には、東京の業者が日末に駐在員を置いて鯨を捕っています。続いては北村源造、円居半助が共同して新氣捕鯨業を起しております。この日末網と新氣網のあった頃の捕鯨法は非常に原始的な幼稚なもので、最初に行われたのは生捕法で2頭を捕獲、次に網獲法で行われましたが、前者は経費がかさみ、後者は荒天や潮流に流され成功することなく中止となりました。

ところで日末町史に意外なと思う記事がありました。日末の網獲法が中止となった後「円居半助の尽力で嘗て金沢で武士であった河波有道から資金の融通を受けると共に、その世話で捕鯨技術を習得している斎藤氏を招いて、漁具の改良や漁法について教えを受けたのであった」ここに出てくる斎藤氏とは、姓のみで誰を指すのかわからないのですが、この資料を紹介してくださった黒沙資料館々長矢代嘉春氏は、斎藤知一に違いないとおっしゃるのです。もしそれが本当とすれば、身びいきの推測がなりたないわけではありません。北海道にあった斎藤は、たびたび郷里金沢に帰省していることですから、この折に招かれたことが考えられるのです。それにしても河波有道先生ほどの方に招かれるとは、まさに鯨がとりもつ縁と申せましょう。

このように加賀沿海の捕鯨業が盛んなころ、水産博覧会に捕鯨器を出品し賞を得た郷土人は、石川郡金石の木嬰長次郎、高見清助、金沢区下本多町河波有道であります。

捕鯨猟は日末にとどまらず金石・内灘へも及んでいったことでしょうか。この話題は腕白盛りの斎藤少年の好奇心をかきたて、金石や内灘への道を走らせことでしょうか。となると大沼喜三平ならぬ喜三平と結びれることもうなずけるのであります。

起業社の捕鯨

さて北海道に生きる道を求めて移住した元土族たちは、実務の経験はなく商略にうとく、その上計画のずさんなことによって最初の第一歩からつまづき、暗雲のなかにあるありさまでした。

そこで斉藤らの建議した捕鯨業による利潤で社運の挽回を図ることを考えた起業社々長遠藤秀景は、明治18年(1885)3月、択捉島にいた飯田秀魁を呼び寄せ、札幌県下鯨漁場の測量を命じたのです。斉藤はこの飯田秀魁とは、盈進社結成時から行動をともにしてきた同志であります。

飯田秀魁の『起業社用鯨場測量之時日記』は、明治18年4月19日函館区を出発して札幌県岩内郡岩内村にいたる道程を、休憩や宿泊の村の人口、渡世のさま、地形にいたるまで、粗末なザラ紙に鉛筆で詳細に書き留めています。この旅日記は隠れた北海道史ともいえましょう。このなかに鯨が出てくるので抜き書きしましょう。

野田生村=石川県江沼郡ノ人ニテ前田庄五郎ナル者有、該人鯨業ヲ本年ヨリ創ムト云、依テ其家ヲ訪ウ、家主留守ナリ亦、昨年落部村ニ於テ鯨老本ヲ漁ス。鯨名ナガスト云ウ、凡ノ四百円余ニ売捌キタルト云ウ。

江沼の人がここに出てくるのは面白く、飯田はどんなにか、この人に会いたかったろうと思われま。

4月28日、いよいよ鯨漁場測量のため磯谷に向けて岩内港を出発するのです。このとき斉藤が見送りのため同船していますから、斉藤は岩内で船を準備するなどして、飯田のくるのを待っていたものと思われま。船は途中雷電沖で烈風に会い、散々な目にあいようやく島古丹村に着くのです。飯田はすぐに鯨業願書をしたため漁業組合総代の連印を請うため漁業事務所に出かけましたが、総代の帰宅後のこととて翌朝出直し願書に連印を請うのですが、なかなか承知してくれません。この件を日記のままに記しますと、

願書ニ連印ヲ催ス、然ニ横洞村総代佐藤栄五郎代人、同村中野松太郎・副総代島古丹村山川柳蔵ナド頑固ニシテ旧弊ヲ守リ、或ハ鯨ハ鯨ノ保護神ナリ、之ヲ獲魚スルトキハ必ズ鯨ノ不漁ヲ来サント、従来村民他人ヲ問ワズ鯨漁セザルヲ以テ規約ス、依テ連印スル能ワズ、頻リニ之ヲ拒ム、小生其然ラザルヲ論シ脱クニ國産ノ繁殖ヲ以テス、尙肯セズ依テ戸長ニ談ス、戸長亦タ如何トモスルニ能ワズトス、本日ハ之ニテ消光ス。

三十日曇、午前七時戸長役場ニ至リ、彼ヲ総代ナド拒ム所ノ理由書ヲ認メ呉レト云、終ニ其理由書ヲ取立テ、亦戸長ノ附録ヲ請ヒ之ヲ以テ帰宿ス。

それから寿都の郡役所に赴き、郡長に面会し許可に尽力してほしいと頼むのですが、郡役所においては漁民の保護をせざるを得ずということで、ここでもよい返事がもらえなかったようです。飯田にしてみれば郷里石川県での捕鯨業は着々実績を上げるなかで、農務局においては水産博覧会に際し、河波有道を「懇ニ居民ヲ勧誘シテ捕鯨ノ方法ヲ授ケ爾來漸ク各村ニ伝播シ新ニ一産業ヲ開カシム、其ノ巧已ニ多シ」と賞賛しているにもかかわらず北海道においては、国の殖産興業のかけ声も空しく土地の根強い習慣に拒まれ、ジレンマのうちに書き留めたであろう日記の最後は、

五月五日晴、午前九時ヨリ島本生等、船ヲ以テヘンケ崎(弁慶岬か)ヲ測量ニ至ル殆ノド……………

以下読み取りにくく、高波が寄せ来りて測量できず帰った。というように読めるのです。日記とともに『函館県下磯谷郡海辺、鯨漁場測量図』が残っていますから測量だけはなんとか実行できたということでしょう。

ところで北海道の同学の方から「明治17年に磯谷漁業組合規則が成立して、3月から5月までの間は鯨、トド、イルカ漁は禁止となった」との知らせを受けました。道理で鯨漁場の測量をするだけとはいえ、こと鯨にかかわることには厳しい目があったことが頷けるのです。それに禁漁期間は鯨漁期であることや、この期間をはずせば磯谷では鯨や、トド、イルカを捕っても差し支えないようですが興味を誘う話です。ちなみに、起業社が捕鯨基地と定めた岩内港は札幌県に、捕鯨場の磯谷郡は函館県に属していました。

この17年、斉藤は担振国室蘭・有珠西部において試猟し、鯨別で克鯨1頭、門別でサカマタ1頭を捕えています。どのような猟法で捕獲したのかわかりませんが、郷里の内灘・金石の屈強な漁師を引率してきていますから、彼らのなかには、すでに加賀の海で捕鯨の経験をもっていた者もあると思われま。捕鯨に多少の経験ある斉藤といわれるのは、あるいはこのときを指しているのかもしれないと気づきました。

この担振・有珠の試猟について、土地の漁師との間にトラブルは無かったものでしょうか。もっともその頃は外国に門戸を開いて久しい函館港には、アメリカの捕鯨船が出入りしていたということですから、この沿海には捕鯨についての認識があったのかもしれない。そして斉藤らは、ここを先途にアメリカ式捕鯨法

を学んだかもしれません。

明治18年の話を続けましょう。『岩内町史』の「前田村起業社事業開始」から武内嘉三郎翁直話（昭和23・11・30）を移記します。

前田村の起業社は、農業と漁業を目論見たもので、或る年の鯨漁期に、起業社の鯨捕船（川崎船位のもので、ミヨシが尖ってる船）が入港していた。其の時雷電沖に鯨が現れたので直に出港、うまく鉾を打ち込んだ、ところが鯨場の親方達が承知せず港内に引き入れること罷りならぬと騒ぎだし、浜は全町総出で騒ぐ、郡役所に鯨側の代表がやってきて入港阻止運動をする。そこで郡役所が敷島内から船を出させて、これに腕節の強いのが乗って鯨船に漕ぎつけて交渉論議の末、とうとう鉾を切り離して鯨を逃してやってしまった。それから鯨船の遠藤等が郡役所に上陸してきて、郡役所の責任を追求しこころも一騒動を起したが、泣く子と地頭には勝てずで何とか納まった。この騒動は全町挙げて一日中騒ぎ回ったので、当時これを一日騒ぎといった。

これは飯田秀魁が鯨漁場を測量した後に起きた事件と思われる。この騒動は岩内町の出来事に止まらず、起業社の捕鯨事業の放棄に繋がる騒動でもあったのです。

折しも起業社内に起きたトラブルは、あまつさえ思わしく運ばぬ事業をさらに停滞させることになり、以後、経営方針を開墾事業ひとつに改めることになり、起業社の命運をかけて創めた捕鯨事業は、岩内での騒動が災いして断念の止むなきにいたったのです。しかし、ひとり斉藤のみは捕鯨を諦められず、なおも北海道に留まるのでした。斉藤が捕鯨に執着するのは一体何がそうさせるのでしょうか。ここにひとつの記録を紹介することによって解明できるものと思います。

岩内の一日騒動の当日、郡役所の書記をしていた興津寅亮は、出張で不在の郡長にかわり、この騒動の仲裁を見事に成し遂げ『興津寅亮備忘録』の「一日騒動の記」に詳細に書き留めています。これを読むと開拓地にある行政官の心意気がひしひしと伝わってくる思いがいたします。その一節に、

北海道ニテハ一般ニ鯨ヲ恵比須ト称シ鯨ヲ追ヒ米ルヲ以テ、鯨業者トシテハ有益ナルモノナリト主張シ居タリ、亦タ鯨業者ヲ調ブルニ、鯨ハ鯨及其卵ヲ食スルガタメ来ルモノニシテ、鯨ニ対シテ大害アルモノナリ。而シテ彼ヲ解剖シテ見ルニ、鯨卵三石余ヲ認メタリ。此両説ハ何レモ利アルガ如クナルモ、要スルニ前説ハ慣習迷信ニ出タルモノニシテ、後説

ハ晩近実験ノ上其得失ヲ明瞭ナラシメタルモノナリ。故ニ官庁ニ於テモ如此該漁ヲ許可セラレタルモノナラン。

と推考しています。当時、朝令暮改の行政下によりやく内閣制度の成立をみる年となるのですが、中央から遠く離れた岩内にあって、英邁なる興津寅亮の説得は、同じ元加賀藩士という身上も手伝って、さしも激昂の起業社々員も次第に耳を傾けるようになるのです。興津は、起業社が今後なおも北海道において捕鯨業を営む方針であるならば、鯨業によって鯨漁に害を与えるものでないという証明を示さねば漁民は承知すまいと論じ、起業社の望みに応え天塩国沿海での捕鯨を奨め、その手続きの労をも厭わなかったのです。この興津寅亮の説諭は、斉藤に深い感銘を与えるとともに捕鯨熱を一層湧き立たせたものと思います。

斉藤は19年（1800）特許を得て、天塩国苫前郡羽幌において操業に入ります。資金は有志からの寄せ集めできわめて乏しいものであったろうと思われます。羽幌町史によれば、

明治十九年青森県人、立崎熊次郎をはじめ川口政吉、柴田善兵衛らが鯨漁業を始め、さらに翌年五月には石川県人の斉藤知一、中西文三郎、黒田某たちが漁船四隻、漁夫二十四人を使って捕鯨業を始めた。ここに羽幌地方の漁業が開始されたのである。

さらに斉藤知一の事績について諸誌に載る「捕獲の鯨を解剖するに、平均老頭の腹中に四石内外の鯨鱈を吞食しあるを発見、鯨漁に害あるを明らかにす」と称せられるのは、いつにこの時の興津寅亮の示唆によるところ大なるものがあると思うのです。

注『興津寅亮備忘録』（札幌市在住、高杉うめ氏所蔵）とは、北海道開拓使時代に郡長格でありながら書記職に甘んじてあった興津寅亮が公私にわたって書き留めた記録で、今日貴重な史料として高く評価されています。これから述べてゆく斉藤については、この備忘録から知り得たことがたくさんあります。斉藤はこの方と生涯交友を以て結ばれました。

羽幌に捕鯨根拠地を開いた起業社の操業は、人煙稀なる地に加えて猟具の不備や、猟夫の未熟によって経営は惨憺たるありさまであったのです。捕獲鯨は20・21年に5頭づつ坐頭、克を捕っているようです。どのような猟法かわかりませんが、岩内で漁民に逃がされた鯨には、鉾40本が打ち込んであったということですから、このときもそのようなことだったろうと思います。斉藤が捕鯨に携って3年、労多く前途の希望空しく思っている折、鹿兒島県人河野圭一郎が社長の大日

本帝國水産会社に、齊藤の獵權を譲るように勧められる話が始まるのです。この件について興津寅亮備忘録から拾いますと。

明治二十二年五月頃、羽幌鯨業ノ事ニツキ齊藤知一氏増毛ニ來、高岡氏（前郡長）方ニテ相談アリ、其折栖原ノ大番頭、能登庄吉氏モ來訪、余モ其席ニ列シ皇國（帝カ）水産会社・該ヲ譲ルコトヲ同氏ニ勸告シ其事ニ決シ同氏ハ該会社ニ入り該業ヲ擔任スル事トナリ——

とあります。起業社の捕鯨事業をつぶさに見てきた興津は、とても小規模の経営では捕鯨事業はやっていけないと看破して、このように斡旋したものと思われる。このことによって起業社の捕鯨事業は終わりを告げることになるのです。

帝國水産時代

帝國水産会社は明治21年（1888）6月設立され、捕鯨とラッコ・オットセイ猟に力を入れるのです。この推進を図るため東京の本社を函館に移し、取締役を除くほかの重役は官選を願うなど熱気のある会社でした。この会社の「第二回報告」書によれば、

同月同日（明治21・10・29）北海道天塩園へ本年（22年）三月ヨリ着手スヘキ捕鯨場ヲ設立スル為メ手代齊藤知一外1名ヲ該地ニ派遣シ其準備ニ從事セシメタリ。

とありますから翌22年の会合で、齊藤の獵權を譲渡することとなるのは、このようなきっかけがあつたことと思われます。

帝國水産会社の捕鯨部門の主管になった齊藤は天塩園の捕鯨場で漁夫150人、船13隻を指揮して捕獲した鯨は、22年30頭、23年には40頭を数えました。23年6月この地方を通った佐藤喜代吉の『北海道旅行記』によると、

羽幌ニ日本帝國水産会社天塩捕鯨場アリ。主管齊藤知一ノ談ニ本年大鯨二十七頭、小鯨若干ヲ獲リタリ。目下半バ塩濱トシテ興津地方へ輸出シタル由、羽幌ハ本年鯨大漁ニテ目下メ粕干燥中ナリ。ということであり、ここに興津寅亮備忘録にある面白い挿話を入れます。

帝國水産会社ハ、露國水産会社ヲ雇入レ鯨ヲ銃殺スルコトヲ始メ、鬼島沖ニテ発砲センモ露國人ノ発セルモノ命中セザルヲ以テ、齊藤氏ハ大イニ憤激シ彼ノ銃ヲ取り発シタルニ命中センモ、同氏ハ不幸ニシテ怪俄シ、タメ上陸後ロシア人ヲ叱咤シ東京へ追ヒ返シタリ、其ノ勢ニ彼モ恐レ平時ノ挙動ニ反シ、

下等ノ船客トシテ立去リタリ。

血の気の多い齊藤の性状が目に見えるような話です。ここに出てくる銃とはどんな銃だったのでしょうか。それにしても獵法についてはまったくわかりません。齊藤知一略伝によれば、北海道における獵法はアメリカ式（ボート式）と書いてあるのみですが、これもいつ頃か行つたものかわかりません。

帝國水産の天塩で捕鯨はほぼ10年間に及ぶのですが、23年（1890）頃より藩猟となり34年（1901）には廃止されました。

これより前、齊藤は、官界から迎えられた帝國水産二代社長・伊藤一隆と意見が合わず、在社5年にして辞職し以後独立業となるのです。ちなみに伊藤一隆は札幌農学校の一期生にして、一年後輩の内村鑑三とともにわが國の水産界の先駆者とうたわれた人であり、伊藤一隆は敬虔なるクリスチャンで生溷貫き通した信念は、禁酒運動にあつたということであり、齊藤と伊藤社長の仕事上の経緯はわかりませんが、インテリ・クリスチャンと羽幌町史に見る「北海道では泣く子も静まるといわれた俠客でもあつた由」といわれる齊藤との、意見の相違をいう前にすでに異質のものを感じおかしみをもおぼえるのです。

独立業時代

さて独立して石狩国浜益村に根拠を定めた齊藤は、鯨を追って郷里の沿岸や、愛知県の知多半島にまで出漁しているのです。浜益村の操業は2～3年のことで捕獲鯨は14頭、郷里沿岸、知多半島の方は不明であると、友人渡辺渡の語るところであります。

その後種々の失敗から一時は海扇業を試みたり、土木請負業に転じて年を経るうち、明治34年（1901）帝國水産の希望によって、3年契約で獵權を借り受け、また捕鯨に従事するのであります。しかしながらこの頃は、鯨の群がめつきり減り捕獲高はあがらぬまでした。

3年が過ぎて捕鯨から離れた齊藤は、留萌原野の炭坑や、神威の文珠炭坑の経営に転じ、日露戦争前後の石炭の需要に応えたのでした。

日露といえば、明治24年（1891）に起きた大津事件で知られる露國皇太子ニコラスが帰國の途次、朝鮮海峡に群游スル鯨の大群を見て、ウラジオストックに着くや早速露國大洋捕鯨会社を創らせ盛んに鯨を捕つたのです。これらは長崎港からわが國にも輸入され、ために日本海・長州捕鯨は大打撃を受たのです。このことが遠因となって、長門の奈古出身の岡十郎がノル

ウェー国で捕鯨法を学び、わが国にノルウェー式捕鯨法を導入されたことは、近代捕鯨史をひもとく者のひとしく知るところです。

韓海での捕鯨業績に刺激を受けたわが国では、明治39年(1906)から40年にかけて、競って捕鯨会社が設立され、その数12社にのぼりました。そのうちに、元陸軍中将塩谷方園の主宰する大日本水産会社がありました。会社はノルウェー国から「ボーラー」外一隻の捕鯨汽船を購入し船名を第一博運丸、第二博運丸と改称して捕鯨に当たらせました。後の日本水産の第一、第二博運丸はこれをいうのです。ところでこの会社は業績不振に落ち入り、これを建て直すため斉藤に助力を求めてきたのです。陸に上った斉藤がまた捕鯨業に引き戻されることになったのは、塩谷方園が同郷人であることの好みや、宮内省が株主であるがため会社をつぶすわけにもゆかぬことがあってのことでありましょう。

大日本水産・東洋捕鯨時代

明治42年(1909) 斉藤は大日本水産会社の専務に迎えられたのです。社内を刷新した斉藤は、新漁場を開拓のため、独立業時代の経験を生かして各所に船をすすめ、小樽市近郊の朝里村、根室の根布盛、あるいは樺太にも根拠地を構え、遠くは越前敦賀湾口沓村にまで航しています。大正5年(1916)には根室方面で半年に186頭の大漁をあげています。

この年、社長の地位にあった斉藤は、近代捕鯨の鼻祖岡十郎の説く「捕鯨業者は鯨を捕るばかりでなく、これを保護し繁殖を計らねばならない。それには数多の捕鯨会社が統合してこれに当たらねばならぬ」との呼びかけに応じ、彼が社長の東洋捕鯨株式会社に合併するとともに取締役役に就任したのです。

東洋捕鯨株式会社は、岡十郎の主唱によって明治43年(1910) 捕鯨会社数社の第一次合併によって発足した会社です。したがって、大正5年の大日本水産会社ほか数社の合併は、第二次合併ということになります。

斉藤の東洋捕鯨会社にいたるまでの捕鯨歴を思うとき、最新にして最大の捕鯨会社に参加し得たことを感無量の思いでみるのであります。東洋捕鯨は以後、日本の捕鯨業の重責を担って発展してゆくのです。

斉藤は東洋捕鯨にあること7年、大正12年(1923) 9月29日、静岡県安倍郡三保村灯台下にある別荘で62歳の生涯を終えました。いま香典帳のなかに捕鯨・漁業関係の方々のお名前を多く数えますことは、斉藤の面目躍如たるものを感じます。

あとがき

斉藤知一の捕鯨業時代について、おぼつかないままに述べてきましたが、なにしろ鯨はおろか身近に見る魚の知識も持たぬ私が、鯨にとりつかれた男の話を書くのですから、なんともぎこちない思いがいたしました。しかし、捕鯨について書かれたもののなかに、斉藤知一の名を見出したときの驚きと感激は、大叔父を見る目を改めなければと思うほどでした。

斉藤は幼いとき父を亡くし、4人の姉妹とともに母親の手で育てられました。彼は生米、粗野ともいえる性格で、母や姉妹に似ず学問嫌いでしたから、金沢で一生をおくったとすれば名も無い男にすぎなかったでしょうに、北海道に渡った彼は水を得た魚の如く、捕鯨事業に打ち込んで彼なりの生き方を貫いたことは、明治に生きた男といえましょう。私は、斉藤知一が捕鯨に情熱を燃やした地、北海道と鯨に万歳を唱えてやみません。

ぶ つ く す

- 1) The Whales Research Institute, 1980. *The Scientific Reports of the Whales Research Institute*. 218pp.
- 2) Braham, H.W., W.M. Marquette, T.W. Bray and J.S. Leatherwood (eds), 1980. The bowhead whale: Whaling and biological research. *Marine Fisheries Review*, 42(9-10):1-96.
- 3) Zemski, V.A., 1980. *Atlas of marine mammals USSR*. VNIRO, 183pp. (in Russian)
- 4) Herman, L.M. (eds), 1980. *Cetacean Behavior: Mechanisms and functions*. Wiley-Interscience, New York, 463pp.